

新しく始めた「科学史」講義の試み

高山 進

1. はじめに

筆者はこの3月に退職する三重大学に「一般教育学科目自然科学概論」教員として32年半前に赴任した。その前の9年間の修業時代に、いわゆる「個別科学史」の研究とは別に、「一般科学史」に関する研究会を何年か熱心に継続し、科学・技術と社会との相互作用を考慮しながら古代から現代までの流れを通史として描くことはできないか模索をしていた。赴任後に担当することになった「自然科学概論」においては、当初「一般科学史」の中からトピックス的に事例をとり上げながら話を組み立てていたが、しだいに人間と自然環境の相互関係史（環境・文明史）として通史を描くことに関心が移り、年々試行錯誤を行いながら1993年にはある著書の一部に「環境と人間活動の関連史—森林・農耕・技術の関わり」と題する文章を書くに至った。朝倉書店から『講座・文明と環境』シリーズの刊行が始まったのが1995年で、このテーマの重要性は広く世に問われることになった。そのシリーズの成果その他を受け止め、2004年に筆者は『『ミクロコズム』のアナロジーで考える『環境—文明史』の枠組み』としてまとめ、その大きな展開とかかわる一つのポイントとして、ヨーロッパにおける「近代科学」の誕生が「マルサスの罠」と表現できる社会的危機を通して出現した点に触れた⁽¹⁾。

筆者は、1997年に一般教育教員から生物資源学部の「地域環境管理学」担当教員に配置換えとなり、その後の関心は地域における具体的な環境政策の分析、提案をメインテーマとし、2010年に名古屋で行われた「生物多様性条約」へのかかわりを契機に環境に関する国際条約、国内政策、地域の取り組みをどうつなぐべきかといったテーマに関わることはできたが、「環境・文明史」と「科学史」の接点をさらに深める機会を逸し、いよいよ定年を間近に迎えるようとしていた。そんな折、修業時代につながりのあったTさんの紹介で2014年秋に岐阜県のある大学において「科学史」(12コマ)を講義することになった。この講義を準備する過程で懸案の課題に関係する論点をいくつか取り上げることができたのでそれを報告したい。

2. ねらいと方法

シラバスにおける「目的」の項で「科学・技術」と「文明」関わりを次のように述べた。

「強力な「科学・技術」が支えている私たちの「文明」は、多くの知識を獲得し、大量に資源を使い、より早くより便利になった半面、このままでは地球と共存できないのではないかと、いう危機を抱えるに至っています。地球温暖化や原発事故で見えてきたように、この負の側面も「科学・技術」が少なからず関係していると見る事ができるでしょう。この授業では、まず地球上の生き物の中で特異な発展をし、同時に特異な悩みを持つに至った「文明」の歴史を振り返ります。また、17世紀という比較的最近に、ヨーロッパの地で誕生した「科学」とはいかなるもので、この正と負の(強力だが問題を生む)側面にどう関係しているのかを見つめ、人間社会の未来を持続可能にするにはどのような選択肢があり、私たちが「科学・技術」とどう付き合っていけばいいのか、を模索したいと思います。」

方法としてはまずこのテーマを通史として描くことを心がけた。しかし、学生にとってはな